

お茶の時間

トランプは イスラエルの英雄

編集委員長

トランプ大統領は昨年12月6日、ホワイトハウスで行った会見で「エルサレムをイスラエルの首都と公式に認定する時期が来た」と表明した。現在テルアビブにある米国大使館を、聖地エルサレムに移転するとも公言し、この「エルサレム首都認定」発言は世界中で大きな波紋を呼んでいる。

この発言以降、中東問題は一段と混乱を深めることになった。パレスチナやアラブの反発は当然としても、宗教界にも大きな波紋を投げかけた。

イスラエルの中心都市、エルサレムは、城壁に囲まれた旧市街の中に、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の聖地を持つ。第1次世界大戦以降、イギリスの委任統治下にあったパレスチナは、イスラエル建国に伴う国連パレスチナ分割決議（1947年）により、国連管理下に置かれるとされた。

しかし、1948年5月のイスラエル建国とともに起きた第1次中東戦争でイスラエルが西エルサレムを占領し、さらに1967年の第3次中東戦争では、旧市街の聖地がある東エルサ

レムを占領した。この結果、イスラエルは建国以来主張し続けてきた「首都・エルサレム」を事実上手に入れた。

しかし、国際社会はイスラエルの主張を認めず、ほとんどの国は最大の商業都市であるテルアビブに大使館を置いてきた。

ヨルダンのアブドラ国王は、即座に「イスラエルの米大使館を現在のテルアビブからエルサレムに移転する」という公約を実行に移せば、イスラム過激派を暴力に駆り立て、ただでさえ緊張している中東情勢を激しい苦惱の淵に突き落とすことになる」と警告した。

そのような中で、イスラエル国内でトランプ大統領を英雄視する動きが起きている。エルサレムの通りには、歴史的経緯からイスラム教の英雄にちなんだ名前が付けられている。その名称をトランプ大統領の名前にちなんだ名前前に改称しようとするものである。

読売新聞（1月15日）によれば、イスラエルのカツツ運輸・道路安全相は昨年12月末に、トランプ大統領の歴史的決断に感謝するため、エルサレム旧市街にあるユダヤ教の聖地「嘆きの壁」近くに建設予定の地下鉄の駅名を「ドナルド・トランプ駅」と命名すると発言した。同様に、エルサレム市議は、パレスチナが将来の首都と位置付ける東エルサレムの主要道路「サラディン

通り」を「ドナルド・トランプ通り」に改名するように議会に提案した。

東エルサレムはイスラエルの占領下におかれているが、住民の大半はパレスチナ人である。そもそも「サラディン」は、12世紀にエルサレムを十字軍から解放したイスラム教の指導者の名前前で、パレスチナ人だけでなく、イスラム教徒にとつて重要な存在である。

ここに住むパレスチナ人は、「東エルサレムはパレスチナ人の土地と信じており、勝手な名称変更は絶対に許されない」と考えている。当然、パレスチナ自治政府も「実際に命名すれば、新たな抗議デモが起きる」と警告している。

エルサレムだけではない。北部のキリヤット・ヤム市では、4月開園予定の公園をトランプ氏にちなんだ名称に。西部のアシケロン市では、市内の通りを「トランプ宣言通り」に改名する動きがある。

ふと「英雄とは何か」との思いが頭をよぎる。アラブやパレスチナにとつて、究極の悪人であるトランプ大統領が、イスラエル人にとつては英雄になる。

悪名が高ければ高いほど、反対側から見れば、英雄に見られるのかもしれないとすれば、どちら側から見ればよいのだろう。